

西脇常記教授退休記念論集

東アジアの宗教と文化

編集 クリスティアン・ウイッテルン／石立善

古本朱子語録について

——『朱子語類大全』未收語録書三十七種——

石 立善

はじめに

南宋の黎靖徳が編纂した『朱子語類大全』は、度宗の咸淳六年（一二七〇）に江西の建昌府で刊行され、世に「朱子語類」と呼ばれている。『朱子語類大全』一百四十卷は、「四録二類」すなわち李貫之編「池録」、李性傳編「饒録」、蔡杭編「饒後録」、呉堅編「建別録」及び黃士毅編「蜀類」、王必編「徽續類」を總合し、全部で朱子門人九十七家の記した語録を集め、「蜀類」の分類を踏襲した巨編である。黎靖徳が諸録を校合し、その誤りを正し、重複を削り、疑わしきを除き、遂に朱子語録の集大成を作り上げたのである。

朱子（一一三〇～一二〇〇）生前、その語録はすでに朱門内部で流傳し讀まれていたが、嘉泰二年（一二〇二）、慶元の黨禁が解禁された後、雨後春筍の如く次々と世に出たのである。以來、朱子門人や私淑者及び後學たちの多くは、朱子語録の収集や傳寫に熱中し、それを讀むことは閑居する朱子に侍し、警效に接するのと同様で

あると考えてきた。さらに、中には語録を究極の基準として朱子の著書より重視した者もいた。初期朱子學の形成と展開を考究する際、朱子語録の果たした役割を考慮しないわけにはいかない。しかし、このような古本朱子語録には、『朱子語類大全』に收められなかったものが甚だ多く、黎靖德自身ですら目にし得なかった語録書も少なくない。實際、古本朱子語録書の一部は「四録二類」の據つた底本である。本稿では宋元の著述や地方志を始めとする歴代の文獻から、『朱子語類大全』⁽¹⁾（以下、『語類大全』と略稱す）未收の南宋人による朱子語録書三十七種を掘り起こし、その編纂事情や存佚を全面的に考察し、朱子語録の古層やその流傳の概貌を復原してみたい。

一、南宋における古本朱子語録書三十七種

(一) 朱子親定『翁季錄』（佚）

蔡杭（一一九三～一二五九）「饒州刊朱子語後錄後序」は『翁季錄』に觸れて云う。

獨念先師又有親目刪定與先大父西山講論之語及性與天道之妙⁽²⁾、名曰『翁季錄』者、久未得出以流行於世。⁽³⁾

（門人たちの記した語録のほか、）先師には、亡き祖父西山と講論した際に性と天道の妙に言及した記録を親ら刪定し名付けて『翁季錄』というものもあるが、その書は久しく篋笥に藏され、世に流傳でなかつた。

私はそれだけが氣掛かりである。

蔡杭は字仲節、號は久軒、建寧府建陽縣の人、蔡沈（一一六七～一二三〇）の次男、朱子門人である。周知のように、蔡氏一族は朱子とは深い關係を持っていたが、上文に云う『翁季錄』は蔡杭の祖父蔡元定（一一三五～

一一九八)の朱子との學問をめぐる談話記録である。恐らく朱子門人が傍でその談話を筆録し、後に朱子親らの刪定を得たのであろう。書名の「翁」は晦翁すなわち朱子を謂い、「季」は元定の字季通を指す。眞徳秀(一一七八〜一二三五)「九峯先生蔡君墓表」の冒頭に蔡沈の父元定に言及している。

聘君以師事朱文公、而文公顧曰、「季通、吾老友也。凡性與天道之妙、他弟子不得聞者、必以語季通焉。」異篇輿傳、微辭突義、多先令討究而後親折衷之、故嘗輯其問答之辭曰『翁季錄』者、蓋引以自匹也。⁽⁴⁾

聘君(元定)は朱文公に師事しようとしたが、しかし文公は、「あなたは私の老友だ。ほかの弟子たちが耳にし得ない性と天道の妙は、必ずあなたに語るのだ」と言われた。極めて難解な書篇や字句については、大體先に元定に討究させた後に、親ら折衷された。故に(文公が)かつて二人の問答の言葉を編纂し、『翁季錄』と名付けたのは、元定を引いて二人が同格であることを示そうとしたのであろう。

蔡元定は朱子との交遊が長く、朱子が生涯において最も信頼を寄せた講友である。また朱門において朱子に次ぐ師範代のような存在で、人々に慕われた。朱子はまた、「造化の微妙さは理を深く認識した者のみ體得することができ、私は季通とそれを語って厭きることがない」⁽⁵⁾と高く評價した。蔡元定は學殖が深く、特に律呂・象數の學に精通しており、朱子と性や天道など深層の形而上學について語り合ったというのも頷ける。

李光地(一六四二〜一七一八)「刻韓文考異跋」によると、清人の呂氏の先祖のもとに『翁季錄』が長年藏されていたが、後に『韓文考異』とともに散逸してしまったという⁽⁶⁾。その後、李光地は『朱子全書』の編纂を機に、懸賞金をかけて『翁季錄』を献上する者を募るように南巡する康熙帝に上奏したが⁽⁷⁾、その書は遂に世間に姿を現すことはなかった。

(二) 陳淳編『郡齋錄』(佚)

(三) 陳淳編『竹林精舍錄』(佚)

陳淳(一一五九〜一二二三)は字安卿、號は北溪、漳州龍溪縣の人、朱門高弟の一人である。陳淳録は庚戌(一一九〇)と己未(一一九九)に聞き書きしたもので、「饒録」卷十三と卷十四に収められている⁽⁸⁾。

『郡齋録』と『竹林精舍録』について、『北溪大全集』卷十に兩書の後序が残っている。二つの序文によると、『郡齋録』は庚戌(一一九〇)十一月十八日より辛亥(一一九二)五月二日にかけての師事記録で、『竹林精舍録』のほうは己未(一一九九)十一月中旬より庚申(一二〇〇)正月五日に聞き書きした言葉である。また、序文の末尾の日付から、『郡齋録』は慶元六年庚申(一二〇〇)十月に編纂され、『竹林精舍録』は嘉泰元年辛酉(一二〇二)正月に編纂されたことが分かる。このような細密な記述には陳淳の几帳面な性格が現れている。また、その編纂の縁起について、「竹林精舍録後序」で陳淳が述懐している。

追思嚴訓、洋洋在耳、不知涕零。於是編而集之、以爲終身鑽仰之警、庶幾朝夕目擊、常有以不替其在如之誠、而無味乎此心之靈。

先生のご訓辭を追憶し、洋洋として耳元にあるようで、悲しくて涙が止まらない。そこでご訓辭を編集し、終身學問を探究する警めとして、朝夕目にし、いつも先生のお側に侍するような誠心誠意を持ち、自分の良心に忤らないようにする。

ほかの朱門弟子も陳淳と同じような思いで師の語録を編纂したと言えよう。また、原文の「在如」は「如在」に作るべし。『郡齋録』と『竹林精舍録』はいずれも傳らないが、『北溪先生字義詳講』卷下「經權」の陳北溪の門人による附注に「先生が編纂した文公の『竹林精舍語録』云云と見える。また『經濟文衡後集』卷十四「論荆公欲富國強兵之意」條も『竹林精舍録』の語録を引いている。『郡齋録』と『竹林精舍録』が刊刻されたかどうかは今のところ考察し得ないが、『竹林精舍録』は陳北溪門下及び朱子の後學においてある程度流傳したこ

は疑いなかろう。

(四) 度正刊「朱子語録」(佚)

度正は字周卿、號は性善、合州巴川縣の人、朱子晩年の弟子である。『語類大全』には度正録は載せられていない。初めは劉德修に學び、後に朱門に入った。

度正が刊刻した朱子語録の書名は不詳で、諸家の書目にも著録されていないが、魏了翁(一一七八〜一二三七)「眉州刊朱子語類序」はその書の刊刻経緯を詳しく語っている。⁽⁹⁾ 嘉定元年(一二〇八)、度周卿は成都にいた魏了翁に対し、魏氏家藏の語録を刊行し、後學を裨益してほしいと懇請したが、魏了翁は學ぶ者が語録頼みになつてしまい、濫用する弊害を心配し、拒否したのである。度正はしばらく斷念していたが、數年後、魏了翁所藏の語録の一部を手に入れた。彼は師説を公刊する意志が強く、結局魏氏の忠告を聞かず獨斷で四川の青衣で刊行した。魏氏の所藏していた語録は膨大な量で、元々もう一人の朱子門人輔廣に贈られたものである。度正の刊刻した語録はその十分の一二に過ぎず、その後李貫之が嘉定八年(一二一五)に池州で刊刻した「池録」はその十分の六七であつたという。

度正が語録書を刊刻した年代であるが、嘉定元年(一二〇八)より以後の數年で、「池録」刊刻以前ということになる。故に、度本「朱子語録」は嘉定三年(一二一〇)より八年(一二一五)までの間に刊行されたと思われる。一二一五年に付梓された「池録」が最も古い朱子語録であると通説として説かれてきたが、實は度正の青衣本語録こそ現在確認できる刊行された最古のものである。

(五) 楊方編『寒泉語』(佚)

楊方(一一三四〜一二二一)は字子直、汀州長汀縣の人、早年に朱門に入り、師事期間が最も長い弟子である。楊方録は庚寅(一一七〇)に聞き書きしたもので、「饒後録」卷一に收められている⁽¹⁰⁾。

蔡杭「饒州刊朱子語後録後序」にいう。

淳祐戊申、杭將指江東、鄱陽洪叔魯芹以其外大父吏部楊公方手所録『寒泉語』見示、既又於安仁湯叔遜汲得
其家藏包公揚所録。二公在師門爲前輩、所録尚未編入、則所遺者亦多矣。

淳祐戊申(一二四八)、杭が江東に向かおうとした時、鄱陽の人洪叔魯(名は芹)はその外祖父の吏部の楊公方の手録した『寒泉語』を見せてくれた。さらに安仁の人湯叔遜からその家藏する包公揚が記した語録を手に入れた。楊・包の二公は師門においては先輩にあたるのに、二人の記録はまだ既刊の語録書に編入されていない。ほかの遺漏も多からう。

蔡杭は鄱陽の洪芹よりその外祖父に當たる楊方が親ら記した『寒泉語』を見せられ、安仁の湯叔遜から得た包揚録と合わせてその「饒後録」に入れたのである。蔡杭が見た『寒泉語』は楊方の手稿本で、單行書として上梓されることはなかったと思われる。

(六) 鄭可學編『師說』(佚)

鄭可學(一一五二〜一二二二)は字子上、號は持齋、興化軍莆田縣の人、朱子高弟の一人である。鄭可學録は辛亥(一一九二)に聞き書きしたもので、「饒録」卷十六に收められている⁽¹¹⁾。

『師說』十卷は陳宓「持齋先生鄭公墓誌銘」⁽¹²⁾に記述されている。陳宓によると、鄭可學は「私が師より聞いた學問は、すべて精微要妙なものであるから、口傳で文字にしないのだ。年を取ってしまつて、獨りよがりであ

つてはならない。だからその秘傳を文字にして人々を裨益しよう」と言ったことがある⁽¹³⁾。『師説』のほか、鄭可學には『春秋博議』十卷や『三朝北盟舉要』一卷、數百篇の詩もあるが、ここで言っているのは、『師説』の編纂理由に違いない。『師説』は鄭氏が晩年編纂したものであるが、その内容は朱子より聞いたものなので、語録の類いと考えられる。

(七) 襲蓋卿編『晦庵先生語録』 (佚)

襲蓋卿は字夢錫、衡州常寧縣の人で、かつて張栻(一一三九〜一一八〇)に問學し、後に朱子に師事した。襲蓋卿録は甲寅(一一九四)に聞き書きしたもので、「池録」卷二十九に收められている⁽¹⁴⁾。しかし襲氏自身が編纂した『晦庵先生語録』という書物はこれまで全く知られていない。同門の黃榦(一一五二〜一二二二)がその書のために序文を撰したが、全文は以下の通りである。

襲兄夢錫所編朱先生語、字字皆格言也、學者所當留意焉。雖然、言之於口、不若會之於心者其旨深、玩之於書、不若體之於身者其理實。熟味「衣錦尚絅」之章⁽¹⁵⁾、與夫「默而識之」之語⁽¹⁶⁾、則於是書也庶乎其有得矣。⁽¹⁷⁾

襲兄夢錫が編纂した朱先生の言葉は、一字一字がすべて格言であり、學ぶ者は留意すべきであろう。うわべで話すよりも、心に理解したほうがその旨はより深く、書物を玩味するよりも、體に體得したほうがその理はより充實したものととなる。とはいえ、『中庸』の「衣錦尚絅」の章と、くだんの「默してこれを識る」という(孔子の言葉)をよく咀嚼すれば、この書において益が得られよう。

この序文の日付は「嘉定癸酉七月望日」となっているので、襲夢錫が輯めた『晦庵先生語録』は嘉定六年(一二二三)に成立したのであろう。池録の成立より二年早い。ただ『晦庵先生語録』は諸家の書目には著録されておらず、刊刻できなかったと思われる。

〔八〕曹彦約刊『朱文公師友問答』(佚)

曹彦約(一一五七～一二二八)は字簡甫、南康軍都昌縣の人、兄の彦純と同じく朱子に學んだ。方回(一二二七～一三〇七)「先君事狀」に次の記述が見える。

在蓬・利州、蜀士執經、皆喜得師、臺閩爭剡薦。利路帥曹公彦約、尤深相知、所刊『朱文公師友問答』、委先君訂正、今行于世。⁽¹⁸⁾

(先父が)蓬州と利州にいた際、蜀の士は經を執り、皆師を得ようとしたので、地方長官は争って推薦してくれた。利州路の帥である曹公彦約は尤も深く先父のことを知っており、その刊刻した『朱文公師友問答』に關して、先父に校正を任せた。今その書が世に傳わっている。

方回の父方琢(一一七四～一二二九)は、曹彦約の刊刻した『朱文公師友問答』のために文字を校正したのである。『朱文公師友問答』は曹彦約本人の筆録なのか或いは同門たちの語録を集めたものなのかは、今知ることはできない。『朱文公師友問答』の刊行期については、「先君事狀」によると、方琢は嘉定七年(一二一四)に楚州の州學教授となつてまもなく、蓬州に移されたという。また、魏了翁が撰した曹彦約の墓誌銘⁽¹⁹⁾は『朱文公師友問答』のことには觸れていないが、曹氏は嘉定八年(一二一五)利州の運判に除せられたので、その書は一二一五年あるいはそのやや後に刊行されたと思われる。つまり、「池録」とほぼ同時期の刊行ということになる。また方回の記述によつて、元の初めまで『朱文公師友問答』が通行していたことが分かる。

〔九〕程永奇編『朱子語粹』(佚)

程永奇(一一五一～一二二二)は字次卿、號は格齋、徽州休寧縣の人で、朱子門人である。『語類大全』には程永奇録は載せられていない。

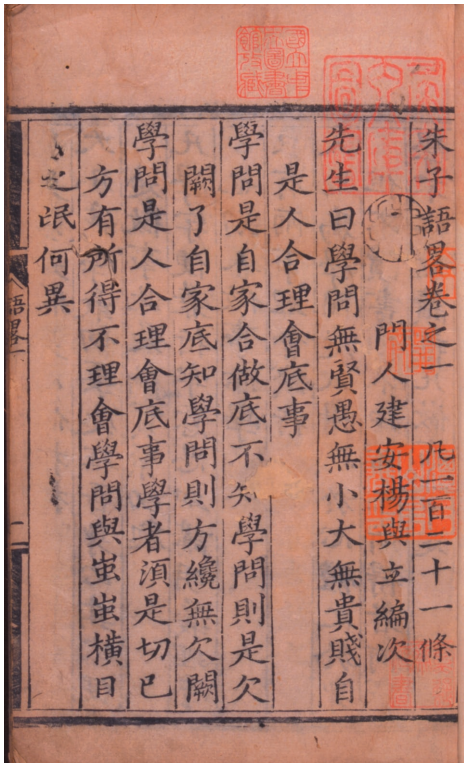
『朱子語粹』は『朱子實紀』卷八の略傳に見えるが、その編纂については、葉秀發「格齋先生程君永奇墓誌銘」⁽²⁰⁾は「文公語類」は多くの手によって記録されたもので、純駁不一なので、(永奇が)自ら取捨選擇し、『朱子語粹』十卷を作った⁽²¹⁾という。墓誌銘にいう『文公語類』は黃士毅の「蜀類」を指すのであろう。『朱子語粹』は程永奇の筆録した語録書ではなく、「蜀類」をもとに抜粹し再編纂を行ったものである。また、『朱子語粹』の成立であるが、「蜀類」は一二二〇年に刊行されたもので、程永奇は嘉定十四年(一二二二)に卒したので、『朱子語粹』は程永奇の最晩年すなわち一二二〇～一二二一年に編纂あるいは刊行されたと思われる。

(十) 楊與立編『朱子語略』(存)

楊與立は字子權、號は船山、建寧府浦城縣の人、一族の楊道夫(字仲思)、楊驥(字子節)とともに朱子に學んだ。楊與立録は壬子(一一九二)に聞き書きしたもので、「饒録」卷二十四に收められている。

『朱子語略』二十卷は『郡齋讀書志附志』卷五上に著録され、趙希弁は「楊與立が晦庵先生の言葉を編纂したもので、蕭一致が道州で刊刻した⁽²²⁾」という。また呂午(一一七九～一二五五)も「徽類」の序でその書に觸れて、「嘉定の庚辰(一二二〇)・

明弘治四年(一四九二) 南京國子監重刊本『朱子語略』(臺灣國家圖書館藏)



辛巳（一二二一）の頃に至って、建安の楊與立が始めて『語略』を集約し、東南地域に流布した⁽²³⁾と記述している。呂氏の記述により、『朱子語略』は一二二〇、一二二一年に成立したことが判明する。

『朱子語略』は全部で二千四百餘條、細かく分類した上で語録を並べているものの、類目の名を一つも挙げていない。筆者はこの書の内容を考察し、分類したことがある。以下にその類目を並べる。

卷一「爲學之方」 卷二「心」 卷三「格物致知」 卷四「修身」

卷五「徳、道」 卷六「讀書法」 卷七「小學、四書」 卷八「五經」

卷九「諸子、史書、詩文」 卷十「論文」 卷十一「太極、天地」

卷十二「性、氣」 卷十三「仁義禮智」 卷十四「心性情」

卷十五「盡性至命」 卷十六「爲政」 卷十七「聖人」

卷十八「諸儒」 卷十九「賢人」 卷二十「論異端」

『朱子語略』の編纂や特色、版本などについては、拙稿『朱子語略』與『朱子語錄格言』——南宋朱子語錄的二形態⁽²⁴⁾を参照されたい。

(十一) 李方子編『傳道精語』（佚）

李方子（？～一二二三）は字公晦、號は果齋、邵武軍光澤縣の人で、朱門高弟の一人である⁽²⁵⁾。李方子録は戊申（一一八八）に聞き書きしたもので、「池録」卷六に收められている。

『傳道精語』三十卷後集二十六卷は『郡齋讀書志附志』卷五下に著録されており、「李方子が濂溪・康節・橫渠・明道・伊川・晦庵・南軒・東萊の説を編纂し、分類して集めたものである⁽²⁶⁾」という。『傳道精語』には朱子を含めて兩宋の道學者八人の學説が收められている。ほかの七人はともかくとして、朱子部分の収録内容はその語録であ

るに違いない。『傳道精語』は純粹な朱子語録書ではないが、実際には朱子語録書として同時代人に重視されたのである。例えば、呂午は「徽類」の序において、わざわざ『朱子語録格言』と『傳道精語』を並べて言及している⁽²⁷⁾。また本書の書名は、董鼎『書蔡氏傳輯錄纂注』では『名儒傳道精語』に作っている。これらの事實は『傳道精語』が宋から元にかけてかなり廣い範圍で流布したことを意味している。『傳道精語』の成立年代であるが、李方子は嘉定十六年（一二二三）に卒しており、その前に成立したことは疑う餘地がない。

(十二) 陽枋編『文公語錄四書』（佚）

(十三) 陽枋編『朱文公易問答語要』（佚）

(十四) 陽枋編『文公進學善言』（佚）

陽枋（一一八七〜一二六七）は字宗驥、原名は昌朝、台州巴川縣の人である。陽枋は朱子門人の度正に師事し、後にもう一人の門人夏淵（字亞夫）にも學んだ。朱子の再傳の弟子にあたる。

『字溪集』卷十二附録「紀年錄」によれば、陽枋は紹定四年（一二三二）に『文公語錄四書』を、淳祐十年（一二五〇）に『朱文公易問答語要』を分類編纂し、さらに淳祐十二年（一二五二）に新しく朱子の易說の精要と思われる語録を集めて編を爲し、題して『文公進學善言』といった。書名から判断すると、陽枋が入手した朱子語録に對し再編纂を行ったことが分かる。しかし「紀年錄」や「字溪先生陽公行狀」⁽²⁸⁾には、その三書の刊行された記述は見えない。

(十五) 史守文編『朱文公五書問答』（佚）

魏了翁「朱文公五書問答序」は次のようにいう。

丹稜史孟博守文比歲東遊、識趙季仁師恕于夔。館之累月、得未見之書。乃『易本義』與『論孟集注』、『中庸大學章句』、『或問』之外、又哀當時答問之語爲一編。孟博將刻諸梓、乞言以識篇首。⁽²⁹⁾

丹稜の史孟博（名は守文）は、近年東遊し、夔州で趙季仁（名は師恕）と知り合った。趙季仁の家に泊まることほぼ一ヶ月の間、未見の書を手に入れた。それは『易本義』と『論孟集注』、『中庸章句』、『大學章句』、『四書或問』である。それ以外、さらに當時の（朱子の）答問の言葉を集め一編と爲した。孟博はその書を刊刻しようとして、私に篇首に識す言葉乞うた。

四川の丹稜縣の人史守文（字孟博）は東遊の際、夔州において朱子門人の趙師恕に出會った。趙師恕は字季仁、宋の皇室の後裔である。史守文は朱子の後學で、道學を志した人物である。⁽³⁰⁾ 趙氏の家に寓居する間、史守文は朱子の多くの著書を趙氏より得たのみならず、また朱子とその弟子たちの交わした問答を集めた。その語録資料も當然趙師恕より手に入れたはずである。「五書」とは、『易』、『論語』、『孟子』、『中庸』、『大學』のことである。史孟博はこの語録書を刊行し、朱子の五書に施した注釋の助けにしようとしたのであろう。諸家の書目は、いずれも『朱文公五書問答』を著録していない。また、魏了翁は嘉熙元年（一二三七）に卒しており、その書はそれ以前に編纂あるいは刊行されたと思われる。

(十六) 包揚編『文說』（佚）

包揚は字顯道、號は克堂、建昌軍南城縣の人である。元々陸象山（一一三九〜一一九三）の弟子で、後に朱子に師事した。包揚録は癸卯（一一八三）、甲辰（一一八四）、乙巳（一一八五）に聞き書きしたもので、「饒後録」卷三、卷四、卷五、卷六に收められている。⁽³¹⁾

黎靖徳が景定四年（一二六三）に撰した「語類大全序」で「饒録」について、

其四十二卷「元題『文説』」者、以靖德考之、疑包公揚所録。蓋公之子尚書恢、嘗刻公所輯『文説』一編、視此卷雖略、而饒後録所刊包公録中、往往有此卷中語、是知此爲公所録亡疑。

その四十二卷に見えている「元々『文説』と題されている」ものについて、靖徳わたくしが考えるに、包公揚の記録ではないかと。思うに公の子で、尚書である恢は公の輯めた『文説』一編を刊刻したことがある。その内容はこの四十二卷に見えるものと比べて簡略であるが、「饒後録」の刊刻した包公録の中には、この巻の語が往々見えているので、それは公によつて記録されたものに違いないことが分かる。

という。「饒録」第四十二卷は無名氏録であるが、黎靖徳はその巻が本来『文説』と題されていた痕跡、さらに「饒後録」所收の包揚録と比べることで、包揚録であると推定した。『直齋書録解題』卷二十二に『文説』一卷が著録されており、「南城の包揚（字顯道）が朱侍講が文を論じた言葉を記録したものである」⁽³²⁾という。この『文説』を刊行したのは包揚の子包恢（一一八二〜一二六八）であることが分かる。また、黎靖徳は包氏の記録には疑わしいものや誤りがあるため、削除を行っている。

(十七) 葉士龍編『朱子語録格言』(存)

葉士龍は字雲叟、號は澹軒、處州麗水縣の人、黃榦の門人である。

『朱子語録格言』は全十八卷、四十七の類目に分けられ、語録數は一千五百餘條にのぼる。本書の記録者として、その巻首「語録答問弟子姓氏」に董銖、竇從周、金去僞、李季札、萬人傑、楊道夫、徐寓、林恪、石洪慶、徐容、甘節、黃義剛、龔蓋卿、廖謙、孫自脩、潘履孫、林夔孫、陳埴、錢木之、曾祖道、沈佃、陳淳、陳芝、饒榦、閻丘次孟、楊至、鍾唐傑、黎季成、魯可幾、鄭仲履、李徳之、周伯壽、周介、郭友仁、李儒用、輔廣、廖徳明、余大雅、陳文蔚、李閔祖、李方子、葉賀孫、潘時舉、晏淵など朱子門人四十四人の名が記載されている。王遂「朱

『子語錄格言序』によると、この書はもと十九卷であったが、第十九卷は兵事に關わる内容なので、削られたという。本書の目次は以下の通りである。

卷之一 「太極」、「命」 卷之二 「心」、「性」、「心性情」、「氣」

卷之三 「總論四端」、「仁」

卷之四 「義」、「仁義」、「禮」、「智」、「敬義」、「敬」

卷之五 「誠」、「道」、「忠知忠信附」

卷之六 「陰陽造化風雨霜雪雷電日星附」、「五行氣運」、「律曆」、「天文地理」

卷之七 「鬼神」 卷之八 「古今人物」 卷之九 「君道」、「禮制」

卷之十 「祭禮」、「昏禮冠禮附」、「喪葬」、「官制財賦」

卷之十一 「古今事類」 卷之十二 「政術」

卷之十三 「科舉」、「刑法」、「處變權變附」、「儀刑」、「警戒鑒誡附」、「出處」

卷之十四 「學術」 卷之十五 「持養」、「爲學工夫」

卷之十六 「論經傳子史古今文」 卷之十七 「讀書法」

卷之十八 「議論」、「疑難」、「字訓義名物附」、「論異端」、「雜說」

書前に嘉熙戊戌（一二三八年）仲秋の朱安の序が載せられており、一二三八年に成立したと思われる。この書は後に徐幾（字子與）によって『語錄類要』と改題された。明以後の書目に見えている『晦庵先生語錄類要』は『朱子語錄格言』のことである。詳しい成立事情や版本の源流、語録の底本に關しては、拙稿『朱子語略』與『朱子語錄格言』——南宋朱子語錄的「二形態」⁽³³⁾を参照されたい。

(十八) 朱在編『過庭所聞』(佚)

朱在(一一六九〜一二三九)は字叔敬、一字敬之、朱子の季子である。『語類大全』には朱在録を載せていない。『論語纂疏』巻首「讀論孟集註綱領」は『過庭所聞』の次の一文を引用している。

『集註』於正文之下、止解說字訓文義與聖經正意。如諸家之說有切當明白者、即引用而不沒其姓名。如「學而」首章、先尹氏而後程子、亦只是順正文解下來、非有高下去取也。章末用圈而列諸家之說者、或文外之意、而於正文有所發明、不容略去。或通論一章之意、反覆其說、切要而不可不知也。

『集註』は本文の下に、ただ文字の訓詁、文章の意味と聖經の本義を解説するに止まっている。諸家の説に適切で明白なものがあれば、(注に)引用してその氏名を明記し埋没させない。例えば、「學而」の首章は先に尹氏(焯)、その後ろに程子の説を引いている。こうした配列もただ本文に従い解説していくだけで、高下や去取の差があるわけではない。章末に圓を施して並べた諸家の説は、あるものは經文以外の意味を持っているが、本文に對して發明するところがあるから、省くことはできず、あるものはその一章の意味を通論し、その説を反復するもので、それは重要であつて知らなければならぬ。

『文獻通考』卷一百八十四の「論語集注」の條もこの語を引いており、『集注』全體の理解を助ける貴重な發言と言えよう。注意すべきは『語類大全』卷十四(第五十條)に見える次の葉賀孫録である。

或問朱敬之、「有異聞乎。」曰、「平常只是在外面聽朋友問答、或時裏面亦只說某病痛處得。」ある人が朱敬之に「(先生から)何か違うことを教えてもらつたか」と尋ねた。「普段はただ外(書院)で學友たちの問答を聞くだけだ。或いは家の中でも私の學問上の欠點を指摘されるに過ぎない」と(朱敬之が)いう。

この會話によれば、朱在も弟子の籍にあり、ほかの弟子たちとともにその父に學んだことが分かる。『過庭所聞』

は書院で同席した學友たちの問答を聞き、筆録したものである。朱在は嘉熙三年（一二三九）に卒したので、『過庭所聞』はそれ以前に編纂あるいは刊刻されたと思われる。

（十九）陳文蔚編『師訓拾遺』（存）

陳文蔚（一一五四～一二三九）は字才卿、號は克齋、信州上饒縣の人、朱子門人である。陳文蔚録は戊申（一一八八）以後に聞き書きしたもので、「池録」卷四に收められている。³⁴

陳文蔚「答清江張元德書」は次のようにいう。

下諭所録師訓、每恨智識短淺、無以盡先生之意。但於聽教之際、或未了了、即不敢錄、庶幾不失所傳、以爲後來之惑。頃嘗遍閱諸錄、其他雖非文蔚所敢知、間有曾是當時同侍教之人錄文蔚所問答者、或牽引數事作一事說、或以數日話頭各是一事者作一日說、首尾乖刺、殊覺可怪。文蔚擬欲再拾其遺、別作一錄、庶見本來問答之目。目今未就、俟脫稿、當訪便請益。³⁵

私の筆録した師訓であるが、自分の知力見識が淺薄で、先生の意を盡くすことができないことをいつも痛恨していた。ただ先生からお教えいただく際、きちんと理解できない場合は決して記録しなかつた。それで師傳を失い後人の惑いになることがないようにした。この頃諸錄に遍く目を通したが、ほかの人の記録は文蔚の^{わたくし}知るところではないが、たまに、當時同席で教えを受けた人が文蔚の問答を記した語録でも、あるものは先生の話された幾つかの事をあわせて一つの事にしてしまい、あるものは數日にわたる話題でそれぞれ別の事だったのに、一日に説いたことにしている。その記録の首尾は矛盾して、非常におかしく感じられる。文蔚^{わたくし}は再びその遺漏を拾い、別に一冊の語録書にまとめ、本來の問答の面目を復原させるつもりでいる。今はまだ完成していないので、脱稿したら、お訪ねしてお教えを請おう。

陳文蔚は同門の張洽（一一六一～一二三七）に對し、當時刊行された朱子語録の誤りに耐えられず、その遺漏を補い、語録書を作りたいと傳えた。今本『陳克齋先生集』卷七に載せられている「師訓拾遺」は、朱子語録の遺漏を輯めたものであろう。全部で四十九條の朱子語録が集められ、その大半は『語類大全』には見えない。詳しくは拙稿「論陳文蔚『師訓拾遺』與輔廣『師友粹言』」を参照されたい。⁽³⁶⁾

(二十一) 胡常編『晦翁語録彙編』（佚）

胡常（一二〇二～一二六五）は字立方、號は思齋、台州黃巖縣の人である。

胡常の友人車若水による「晦翁語録彙編序」は、胡氏がその書について『長年骨を折って（編纂を行い）、この書を自分の歸宿としよう』と自ら言った⁽³⁷⁾と記述している。車若水は胡氏の書は朱門弟子の楊與立編『朱子語略』や李方子編『傳道精語』より讀者のためになると高く評價した。そして車若水の紹介で『晦翁語録彙編』を讀んだ杜立齋（名は範）も、その編纂は「蜀類」より精善だといった。車若水が撰した「胡立方墓銘」では、『晦翁語録彙編』にも触れて「その書は分けられた門目の數が少なく、前後の繋がりも途切れがないので、讀者がゆつたりとして探究することができる⁽³⁸⁾」という。ここからその書の特色を窺うことができよう。ただ墓銘では、書名が『朱子彙語』（十卷）となつている。

また「晦翁語録彙編序」によると、編纂が淳祐三年癸卯（一二四三）に完成した時、車若水は胡常から序文執筆の依頼を受けたが、一度辭退し、二年後の淳祐五年乙巳（一二四五）に撰した。従つて、『晦翁語録彙編』は一二四三年に成立し、刊行も一二四五年であろうと考えられる。

(二十一) 『吳必大編『師誨』』(佚)

吳必大は字伯豐、興國軍の人、初め張栻や呂祖謙(一一三七〜一一八一)に學び、後に朱子に師事した。吳必大録は戊申(一一八八)、己酉(一一八九)に聞き書きしたもので、「饒録」卷八に收められている³⁹⁾。

『郡齋讀書志附志』卷五下に『師誨』三卷附録一卷が著録され、「吳必大が晦庵先生の言葉を記録したもので、朱鑑が興國軍で刊刻したものである⁴⁰⁾」という。吳必大は朱子に最も期待された弟子の一人であるが、慶元年間(一一九五〜一二〇〇)に急死した。『師誨』はその手録した遺書と言えよう。吳氏死後、朱子の孫朱鑑(一一九〇〜一二五八)によってその故郷である興國軍で刊刻された。「饒録」所收の吳必大録は、恐らく『師誨』に據つたものと考えられる。『文淵閣書目』卷三には「師誨」一部三冊」と著録されており、明代には『師誨』はなお世に残っていたことが分かる。

(二十二) 『精舍記聞』(佚)

朱鑑編『文公易說』卷二に『精舍記聞』の語録一條が引かれている。同じく朱鑑によって編纂された『詩傳遺說』にも『精舍朋友雜記』の記録數條が見える。両者は同じ書物であろう。精舍とは朱子が紹熙三年(一一九三)に建てた竹林精舍(後に滄州精舍に改名す)のことを指し、朱子晩年の言葉を記した語録書と思われる。

(二十三) 『晦庵先生語録大綱領』(存)

『晦庵先生語録大綱領』は朱子の弟子あるいはその後學が、李貫之編「池録」を抜粹して再編纂したものである。嘉定十二年(一一二九)から咸淳(一二六五〜一二七四)の初め頃までに刊行されたと思われる。本文「朱子語録」十卷、附録三卷からなる。本文「朱子語録」は二十四の類目が立てられ、全部で三百十八條である。附録は上中

下三卷に分かれ、朱子と范如圭（二一〇二〜二一六〇）の論學書簡や朱子門人たちによる文章などが載せられている。その書の目次を列しておく。

卷之一 「心性情才」 卷之二 「命」、「氣質 氣」

卷之三 「道德」、「道」、「德」、「誠敬」 卷之四 「禮義仁智」

卷之五 「禮樂」、「忠恕」、「忠信」

卷之六 「中庸 中和」、「言行」、「志意」、「忿慾 喜怒 善惡 吉凶」

卷之七 「賢者功用」 卷之八 「聖者功用」、「一致之理」、「經權」、「信順」

卷之九 「明經」 卷之十 「尚論聖賢」、「陰陽造化」、「鬼神」

附録上 「范朱二先生疑難問答」

「問忠恕一貫之說」、「問『論語』疑義」、「問『論語』疑難」、「問『孟子』疑義」、「問『中庸』」、「問乾坤二卦之體」、「答朱元晦小柬」

附録中 「浙學之辨」、「鵝湖辨論」、「無極之辨」

附録下 「答程珙問仁義之說」、「先師教人之義」、「文公年譜後序」

筆者はかつてこの語録書について詳しく論じたことがある。拙稿『晦庵先生語録大綱領』攷―附録朱子・范如圭・程端蒙・李方子の佚文―を参照されたい。

（二十四）『別録』（佚）

李性傳「饒州刊朱子語續錄後序」にいう。

先生又有『別録』十卷、所譚者炎興以來大事。爲其多省中語、未敢傳、而卯火亡之。今所存者、幸亦一二焉。

先生には『別録』十巻もある。話されたのは建炎(一一二七―一一三〇)、紹興(一一三一―一一六二)年間以来の大きな出来事である。その多くは宮廷に言及した言葉なので、伝えることを控えたが、火災によって亡佚した。今残存しているのは、幸いに全體の十分の一二ぐらいである。

朱子が建炎、紹興年間以来の政事について談論した語録は、門人によつて『別録』十巻として編纂された。しかしセンシティブな話題だけに、公刊できずに、ほとんどが火災で焼失した。李性傳が目にしたのはそのほんの一部に過ぎない。しかし黎靖徳が咸淳六年(一二七〇)に撰した「語類大全序」はこの『別録』に言及して、

頃嘗問諸其家、則所云存者亦不存矣、甚可惜也。因讀蔡公所刻包公錄凡四卷、其一卷既與「元題」「文説」者相出入、而他三卷所言、大抵多災興間事、疑即李公昔藏而今亡者。但略無互見於諸家之所錄、則與其子樞密所跋『文説』謂「公所錄多且詳、與世所傳大概無異、故藏而不出」云者不相似。樞密又謂「公所錄已亡於建安之火、不復存」、而湯氏乃有藏本、是皆不能使人亡疑焉者。

この頃李性傳の家に(『別録』のことを)尋ねたが、性傳の序にいう残存したものも今はないという。甚だ残念である。そこで蔡公の刊刻した包公錄全四巻を讀んだが、その中の一巻は(「饒錄」第四十二巻の)「元々『文説』と題されている」ものとは違いがあり、さらにほかの三巻の言っているのは、大抵その多くが建炎、紹興年間以来の出来事である。これがすなわち李公が昔所藏していたが、今亡くなったものにあたるのではないかと思う。ただ、その内容は諸家の記録と一致するものが全くない。とすれば、包公の子樞密(である包恢)が『文説』の跋文で「公の記録したものは量が多くしかも詳細である。世に傳わっている語録と内容がおおよそ變わらないので、家藏して公刊しなかつた」と言っているのに合致しない。樞密はまた、「公の記した語録はすでに建安の火災で焼失してしまつて存していない」というが、しかしなんと湯氏(叔遜)が藏本を持つていた。これらはすべてできない疑問である。

という。

黎靖徳は『別録』の残存部分を李性傳の後裔に求めたが、すでに世に存在しなかった。その後、蔡杭「饒後録」に載せられている包揚録がほかでもなく李性傳の舊藏で今亡佚したものではないかと考えた。しかし黎氏の言うように様々な疑問が残る。包氏の記録したものが果たして『別録』の内容であるかどうかは、現在の資料では穿鑿することができない。ここに黎靖徳の文を引き、一説として擧げておく。

(二十五) 輔廣編『師訓編』(佚)

輔廣は字漢卿、號は潜庵、趙州慶源縣の人、朱門における中心的な存在の一人である。輔廣録は甲寅(一一九四)以後聞き書きしたもので、「池録」卷二に收められている⁽⁴¹⁾。その記した語録のうちの八十餘條は朱子に親ら訂正されたものである⁽⁴²⁾。

『至元嘉禾志』卷十三の略傳は、廣には『六經註釋』・『四書問答』・『通鑑說』・『師訓編』・『日新録』・雜著の草藁があり、いずれも家藏されている⁽⁴³⁾という。『師訓編』は輔廣が記した師の語録であるが、刊刻を経ていないようである。輔氏と親交のある魏了翁は、廣のことを「朱文公に従學すること最も久しく、文公の平生の著述や語録を悉く手に入れた⁽⁴⁴⁾」という。了翁は、所藏した大量の朱子語録をすべて輔廣より得ている。『詩童子問』卷首に載せられる「師友粹言」は、その『師訓編』の一部に當たろう。また、「池録」卷二所收の輔廣録の底本は『師訓編』だと思われる。詳しくは拙稿「論陳文蔚『師訓拾遺』與輔廣『師友粹言』」を参照されたい。

(二十六) 李閔祖編『師友問答』(佚)

李閔祖は字守約、號は綱齋、邵武軍光澤縣の人、弟の相祖(字時可)、壯祖(字處謙)とともに朱子に學び、

高弟の一人である。李閔祖録は戊申（二一八八）以後聞き書きしたもので、「池録」巻五に收められている。⁽⁴⁵⁾
『閩中理學淵源考』巻六の略傳は閔祖に『師友問答』十卷があるという。その書名は後述の劉剛中が編纂した語録書と同じものである。

(二十七) 黄義剛編『先師德言』(佚)

黄義剛は字毅然、撫州臨川縣の人、兄の義勇(字去私)と同じく朱子に師事した。黄義剛録は癸丑(二一九三)以後に聞き書きしたもので、「池録」巻二十六と巻二十七及び「饒録」巻三十八に收められている。⁽⁴⁶⁾

『江西通志』巻八十「黄仁傑略傳」の附傳は「人物志」を引き、その次男の義剛は「文公に師事すること、最も久しきにわたった。その議論はとりわけ根據を持っている。かつて文公より聞いた言葉を編纂し『先師德言』と名付けた」という。⁽⁴⁷⁾しかし『先師德言』も諸家の書目には見えず、傳わらなかったのだろう。

(二十八) 童伯羽編『晦庵語録』(佚)

童伯羽は字蜚卿、敬義先生と呼ばれ、建寧府甌寧縣の人である。童伯羽録は庚戌(二一九〇)に聞き書きしたもので、「饒録」巻十五に收められている。⁽⁴⁸⁾

明人の邱濬(一四二一〜一四九五)は『玉溪師傳録』の序文で次のようにいう。

大率朱門之士、閩産爲多、而在建郡者則以玉溪童蜚卿氏爲巨擘、……蜚卿諱伯羽、世居建郡玉溪之上、朱子嘗過其家、題其所居之室曰「敬義」。人因稱爲敬義先生。所著書有『孝經衍義』、又嘗錄其師說、以爲『晦菴語録』。二書藏于家塾中、更兵火不存。其九世孫訓、徧加詢訪、始得語録于鄉人家、然殘缺已過半矣。後以刻本『語類大全』相參校訂、補其缺畧、始克成編、因易其名曰『玉溪師傳録』。⁽⁴⁹⁾

大體、朱門の士は福建出身の者が多いが、建寧郡においては玉溪の童蛭卿氏が巨擘とされている。……蛭卿は諱は伯羽、代々建寧郡の玉溪のほとりに住んでいた。朱子がかつてその家を訪ね、その住まいに「敬義」と題した。人はそのために敬義先生と稱している。著書には『孝經衍義』があり、さらにその師説を記録して、『晦庵語録』とした。兩書は家塾に藏され、戦亂や火災を経て今は存しない。その九代目の孫である訓は徧く探し求め、始めてその語録を郷人の家から得たが、しかしすでに半分以上が欠落していた。後に(訓は)刊本『語類大全』を以て参照校訂し、その欠けている部分を補い、始めて書物として纏めたのである。よつてその書名を『玉溪師傳錄』に變えた。

童伯羽は筆録した師説を『晦庵語録』として編纂したが、その書は家塾に所藏され刊行されることがないまま、亡びてしまった。その後裔童訓は明の成化年間、この書の殘本を手に入れ、併せて黎靖徳『語類大全』を参照校訂し『玉溪師傳錄』と新しい題名を付けたのである。しかし『玉溪師傳錄』は、伯羽が當時編んだ書物の原貌を留めておらず、四庫館臣に疑われて譏られている。『四庫提要』によつて『玉溪師傳錄』一卷附録一卷の大略を窺うことができる。館臣が目にした『玉溪師傳錄』は兩江總督の採進した版本である。その書は「前に『道學統宗』一枚の圖が列べられ、上は伏羲と孔子に遡っているが、伯羽を直接に朱子の下に嗣がせ」、「後ろには『墓表』、『行實』を附し、朱子の詩二首及び『敬義堂銘』が載せられている。⁽⁵⁰⁾」また、卷首に載せる邱濬序のほか、萬曆二十二年(一五九四)に撰された龔道の「後序」をも付す。體例からして、その書は童氏後裔が先祖の學を顯揚するために再編したものと考えられる。

(二十九) 林恪輯『師傳筆錄』(佚)

林恪は字叔恭、台州臨海縣の人、朱子門人である。林恪の記した語録は癸丑(一一九三)に聞き書きしたもので、

「池録」卷二十二と「饒録」卷四十六に收められている⁽⁵⁾。

林格が輯めた『師傳筆錄』は『續修台州府志』卷七十二「藝文略」に著録され、「この書は康熙『台州府志』に見えている。格は朱子に従って游學したので、これは思うに朱子より授けられた言葉を書いたものであろう。今亡佚した⁽⁵²⁾」⁽⁵²⁾と言われる。『師傳筆錄』は「池録」卷二十二所収の林格録の底本に当たると思われる。

(三十一) 吳雉編『文公問答錄』(佚)

吳雉は字和中、建寧府建陽縣の人、朱子門人である。吳雉録は慶元年間に聞き書きしたもので、「饒後録」卷十八に收められている。

『福建通紀』所収「福建藝文志」卷四十一は吳雉の著述に『文公問答錄』があつたと記載し、『道南源委』卷三や『閩中理學淵源考』卷二十の略傳も『朱子問答』があつたというが、同じ書物を指すであろう。

(三十二) 劉剛中編『師友問答』(部分存)

劉剛中は字徳言、邵武軍光澤縣の人、朱子門人である。『語類大全』には劉剛中録は載せられていない。

『考亭淵源錄』卷十六の略傳は剛中の著述の一つとして『師友問答』を擧げている。『福建通志』卷四十八の略傳によれば、『師友問答』の卷數は一卷である。恐らくその書は内容の長いものではない。民國『建寧縣志』卷二十五「藝文志」や『宋元學案』はそれぞれ『師友問答』のうちの二十三條の朱子語録を記載しているが、その書の一部に當たろう。

(三十二) 梁瑒輯『文公語錄』(佚)

梁瑒は字文叔、邵武府邵武縣の人、朱子門人である。

嘉靖『邵武府志』卷十三と『朱子實紀』卷八の略傳は梁瑒が『朱子語録』を輯めたという。『宋元學案』卷六十九にも梁瑒が『文公語録』という書物を編纂した記述が見える。『語類大全』には梁瑒録は載せられていない。

(三十三) 周憫録『師說』(佚)

『考亭淵源録』卷二十三と『朱子實紀』卷八はただ周憫の氏名を擧げるだけである。董鼎『書蔡氏傳輯錄纂注』卷首「輯錄所載朱子門人姓氏」によつて、周憫の字は伯莊であると分かる。その出身地は温州永嘉縣である。

『書蔡氏傳輯錄纂注』卷首「書蔡氏傳輯錄引用諸書」に「周憫録『師說』」という書物が見える。周憫が筆録した朱子の語録を『師說』として編纂し、元代まで傳わつてゐる。『語類大全』には周憫録は載せられていない。

(三十四) 吳英編『論語問答略』(佚)

吳英は字茂實、邵武府の人、朱子門人である。

『朱子實紀』卷八は吳英に『論語問答略』があつたという。『宋元學案』卷六十九の記述も同じである。題名から『論語』に關する問答であろうと推測し得る。『語類大全』には吳英録は載せられていない。

(三十五) 周耜編『文公語録』(佚)

『江西通志』卷九十一に見える周耜の略傳はいう。

周耜、字植叟、星子人。性沈靜、博雅好古、有詩名。常侍父官襄陽、帥臣張杓一見奇之、待以殊禮。晚集『文公語録』、以詔後學。江東繡使禮聘爲白鹿洞主、其講學至老不倦云。

周相は、字植叟、星子縣の人。性格は沈静であり、博雅好古で、詩名があった。かつて父が襄陽に仕官したのに侍していたが、帥である張杓は一見して驚き、特別に禮遇した。晩年、『文公語錄』を集め、後學を教え導こうとした。江東の繡衣直指は周相を禮聘して白鹿洞書院の山長に招いたが、その講學は老年に至つても倦むことがなかった。

また、『明一統志』卷五十二の略傳は、周相が「經史や諸子百家の書に深く通じ、詩賦に長けた。後に朱文公の語錄を集め、分類して別集として、後學を教え導こうとした。學ぶ者は（周相を）尊んだ⁵³」という。周相の編纂した『文公語錄』は類目別の書であることが分かる。

(三十六) 黄大昌・王迂編『經說』(佚)

『郡齋讀書志附志』卷五上は『經說』三十卷を著録している。朱子の儒教經典に關する論説を集めた『經說』は、全部で三十卷、邵武の黄大昌と鄱陽の王迂が編纂したものである。その書の構成は、『易說啓蒙』三卷、『大易問答』二卷、『尚書問答』三卷、『毛詩問答』一卷、『禮記問答』一卷、『中庸問答』二卷、『大學問答』二卷、『周禮春秋問答』一卷、『論語問答』並びに『拾遺』八卷、『孟子問答』並びに『拾遺』並びに『孝經刊誤』四卷、さらに附録『太極解義』、『太極問答』、『西銘解義問答』三卷からなっている。「六經の要旨や『論語』・『孟子』の奥義は、悉くその分類に従い探求することができる。延平の廖德明がこの書のために序す⁵⁴」という。

本書の内容は、『易說啓蒙』や『孝經刊誤』、『太極解義』の三書以外、すべて朱子語録である。王迂の事跡は不詳であるが、黄大昌は字退圃、邵武の人、黄永存の孫にあたる。序文を書いた廖德明(字子晦)は朱子の高弟である。また、朱睦㮮『授經圖義例』卷二十、『千頃堂書目』卷三に見える『晦菴經說』、及び『書蔡氏傳輯錄纂注』に引かれる『武夷經說』はほかでもなくこの書である。

(三十七) 潘桴編『晦庵語類』(佚)

潘桴は字經之、一字介巖、號は介軒、婺州金華縣の人で、王柏の學友である。

『晦庵語類』二十七卷は『直齋書錄解題』卷三に著録され、「蜀人は晦庵語録を分類し編を成したが、處州の教授である東陽の潘桴はその『論語』類を取り上げ、その完備でないところを増益し、學宮で刊行した⁽⁵⁵⁾」と陳振孫はいう。また、呉師道輯『敬鄉錄』卷十三にも「潘桴は金華の人、かつて處州の教授を務めた。蜀人の編纂した『朱子語類』の中の『論語』門を取り上げ、その闕けているところを補い『論語語類』とした⁽⁵⁶⁾」という記述が見える。

『宋元學案』卷八十二「北山四先生學案」の「潘桴傳」に、潘氏『論語語類』の底本は李貫之が編纂した『朱子語類』であると記載されているが⁽⁵⁷⁾、前述した陳振孫と呉師道の記載から見ると、『學案』の記述は明らかに誤っている。陳・呉の兩書は潘桴の據っている底本を所謂「蜀人」の類編した『晦庵語録』であると明言しているので、決して李貫之の書ではない。李氏の編んだ「池錄」は分類された書ではなく、記録者ごとに分卷したものである。潘桴が使った底本はほかでもなく朱子門人の黃士毅編「蜀類」七十家一百四十卷である。黃氏は興化軍莆田縣の人であるが、その書は蜀人の史公說(字廉叔)によって嘉定十三年(一二二〇)に四川の眉州で刊行された。

二、朱子語録と儒教における口傳の中興

前章で論じてきた古本朱子語録三十七種の書誌情報を、下記の表に纏めて記しておく。

南宋における古本朱子語錄三十七種一覽表

書名	卷数	編者	身分	成立	備考	存佚
『翁季錄』	不明	弟子錄 朱子親定	本人	一一〇〇年以前	朱子與蔡元定論學記錄	佚
『郡齋錄』	不明	陳淳	弟子	一一〇〇年	後序存	佚
『竹林精舍錄』	不明	陳淳	弟子	一一〇一年	後序存	佚
不明	不明	度正	弟子	一一一〇～一一二五年	刊刻青衣	佚
『寒泉語』	不明	楊方	弟子	一一二一年以前	手稿本、未刊	佚
『師說』	十卷	鄭可學	弟子	一一二二年以前		佚
『晦庵先生語錄』	不明	龔蓋卿	弟子	一一二三年	黃榦序存	佚
『朱文公師友問答』	不明	曹彥約	弟子	一一二五年頃	曹彥約刊刻利州 方琢校正	
『朱子語粹』	十卷	程永奇	弟子	一一三〇～一二二二年	「蜀類」拔粹	佚
『朱子語略』	二十卷	楊與立	弟子	一一三〇～一二二二年	蕭一致刊刻道州	存
『傳道精語』	三十卷 後集二十六卷	李方子	弟子	一一三三年以前	集兩宋道學者八人之說	佚
『文公語錄四書』	不明	陽枋	二傳	一一三一年	未刊	佚
『朱文公五書問答』	不明	史守文	後學	一一三七年以前	魏了翁序存	佚
『文說』	一卷	包揚	弟子	一一三八年以前	刊刻四川	佚
『朱子語錄格言』	十九卷 後削爲十八卷	葉士龍	二傳	一一三八年	包恢刊刻並跋 朱安・王遂序 徐幾改題『晦庵先生語 錄類要』	存
『過庭所聞』	不明	朱在	弟子 (三男)	一一三九年以前		佚

『晦庵語類』	『文公語録』	『經說』	『論語問答略』	『師說』	『文公語録』	『師友問答』	『文公問答錄』	『師友問答』	『師友問答』	『先師德言』	『晦庵語録』	『師傳筆錄』	『文公問答錄』	『師友問答』	『師訓編』	『別録』	『晦庵先生語録大綱領』	『精舍記聞』	『師誨』	『文公進學善言』	『朱文公易問答語要』	『晦翁語録彙編』	『師訓拾遺』
二十七卷	不明	三十卷	不明	不明	不明	一卷	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	十卷	不明	十卷	不明	三卷	不明	不明	不明	十卷	一卷
潘墀	周相	王大迂	吳英	周佃	梁瑒	劉剛中	吳雉	林恪	童伯羽	黃義剛	李閔祖	輔廣	包揚？	不明	不明	不明	吳必大	陽枋	陽枋	胡常	陳文蔚	弟子	
後學	後學	後學	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	弟子	二傳	二傳	後學	弟子	弟子	
不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	一二三五年頃	一二三五年頃	一二五二年	一二五〇年	一二四三～一二四五年	一二三九年前	
增訂、處州刊刻		並錄著書三種												部分經朱子親訂		「池録」拔粹 建陽坊刻本		朱鑑刊刻興國軍	未刊	未刊	車若水序存	編入陳文蔚文集	
佚	佚	佚	佚	佚	佚	部分存	佚	佚	佚	佚	佚	佚	佚	佚	佚	存	佚	佚	佚	佚	佚	存	

これらの古本朱子語録はいずれも『宋史』藝文志に載せられていないものばかりである。『朱子語略』、『傳道精語』、『文説』、『朱子語録格言』、『晦翁語録彙編』、『師誨』、『經説』、『晦庵語類』の八書を除いて、ほとんどは歴代の書目に著録されていない。

古本朱子語録の編纂については、朱子門人の手によるものが最も多く、再傳の弟子或いは後學によつて輯められたものも數種ある。この三十七種の語録は大きく二種類に分けることができる。一つは、朱子門人が、師事したその場で肉聲を記した一次的語録資料、もう一つは程永奇編『朱子語粹』や潘擘編『晦庵語類』などの、すでに刊行された語録書に對し、さらに己の意を以て取捨選擇し再分類・再編纂を行ったものである。前者は「池録」などよく知られている語録書に收められたもので、陳淳・楊方・鄭可學・襲蓋卿・包揚・吳必大・輔廣・李閔祖・黃義剛・童伯羽・林恪・吳雉などのものが擧げられる。本稿によつて、「池録」などの語録集の基づいている底本について、ある程度明らかにすることができた。そして後者の『朱子語粹』や『晦庵語類』など二次的あるいは三次的編纂は黃士毅「蜀類」をもとにして行っていることも分かる。また一二五二年に刊刻された「徽類」も「蜀類」の翻刻増訂本にあたることから、「蜀類」が當時廣く通行し、大きな影響を持っていたことが分かる。このような二次的あるいは三次的編纂は、朱子の學說の細密な整理段階に入ったことにより、その體系化への試みを意圖したものにほかならない。古本朱子語録のうち、『翁季錄』や輔廣錄の一部が朱子親らの改訂を経ていることは、朱子が自身の語録をも重視したことを示唆しているであろう。

論述の便宜を圖り、「四録二類」及び『語類大全』などの編纂情報を成立年代の順に従つて、以下に擧げる。

南宋刊行朱子語録合集九種一覽表

書名	卷數	編者	身分	成立	刊行地
----	----	----	----	----	-----

池録	四十三卷	李貫之	後學	一二一五年	池州
蜀類	一百四十卷	黃士毅	弟子	一二二〇年	眉州
饒錄	四十六卷	李性傳	後學	一二三八年	饒州
婺錄	二十卷	王伋	後學	一二四八〜一二四九年 ⁽⁵⁸⁾	婺州
饒後錄	二十六卷	蔡杭	弟子	一二四九年	饒州
徽類	一百四十卷	張文虎 洪勳	後學	一二五二年	徽州
徽續類	四十卷	王伋	後學	一二五二年	徽州
建別錄	不明(二冊)	吳堅	後學	一二六五年	建寧府
語類大全	一百四十卷	黎靖德	後學	一二七〇年	建昌府

これらの書物はいずれも語録集、すなわち門人の筆録した語録の合集である。

卷數から見ると、「池録」は四十三卷、「饒錄」は四十六卷、「蜀類」は一百四十卷、「徽續類」は四十卷、そして黎靖徳が參校本とした「徽類」は一百四十卷にも達する。これらの既刊語録集はいずれも卷帙が膨大で、完讀しがいなものである。それに對して、古本朱子語録のほうは、卷數が短いものが多く、長いものでも二十數卷に過ぎない。故にその流傳の早さや閱讀の實用性は上記の通行本に比べて、實に上回ったものであることが分かる。

古本朱子語録の流傳方法も様々であり、刊刻に付されたものもあり、寫本として相傳わったものもあり、編纂後家塾に祕藏されたものもある。しかし、古本朱子語録の全體を見渡すと、「池録」などの語録集に比べて、刊刻されたものは少なく、そのほとんどは寫本あるいは手稿本の形で流傳していた。また、時は南宋末という危急存

亡の秋に當たり、後世に傳わつたものは特に少なく、「四録二類」とともに『語類大全』に埋没してしまふようになった。注意すべきは、『晦庵先生語錄大綱領』のように亡逸はしなかつたものの、祕藏されるだけで、全く後世に知られなかつた語録書もあることである。

一個人の語録が整理編纂され、これほど大量に刊行されたことは、中國思想史上においても類を見ないことと言えよう。その盛況は恐らく朱子本人も予想がつかかなかつたであろう。朱子語録書の編纂や刊行は朱子學派の盛大な勢力によるものには違いないが、その根底には口傳という儒教の傳統が宋代において再興したことが考えられる。北宋に入り、儒者の間では口耳相傳うという口傳のスタイルが復活した。語録は二程とその弟子たちが残したものによつて、口傳の代表的な文體として定着し、その市民權を得た。そして朱子親らが『程氏遺書』や『二程外書』、『上蔡語錄』などの語録書の編纂や刊刻に力を注いだが、その本意は「尹和靜手筆辨」⁽⁵⁹⁾において、孔門の記した『論語』を根據に、二程語録の廢すべからざることを力説したことからも窺える。朱子生前そして没後の時期に口傳は隆盛を極め、語録も空前の地位に昇つたのである。元以後、道學史自身には盛衰起伏の變遷があるが、語録に伴い、儒教における口傳の傳統は清末まで續いたのである。

また、語録という特殊な文體は、それ自身が庶民化の傾向を具有しており、言葉が平明で読みやすいのみならず、その普及のスピードや流布の範圍の廣さの點で、道學者の文集や注釋書より勝つていゝことも看過できないだろう。

結びに代えて

古本朱子語録書を含めた多くの朱子語録の誕生やその流傳は、儒教における口傳の傳統の中興を意味し、初期朱子學の成立と發展において重要な役割を擔つたと言えよう。さらに朱子ひいては宋代道學全體における口傳の意味を考える際、語録と著述との關係、そして道學と佛敎との關係も視野に入れて考究する必要があることは言うまでもない。本稿では紙幅が盡きたため、別の機会に改めて論じたい。

*本稿の一部は第二回韓中「宋遼夏金元史」國際學術シンポジウム（韓國外國語大學校歴史文化研究所・河北大學宋史研究センター主催、二〇〇七年十月二十一日於ソウル）で發表した。

注

- (1) 本稿で用いる『朱子語類大全』の版本は明の成化九年陳煒刊本である。
- (2) 『論語』公治長篇、「子貢曰、『夫子之文章、可得而聞也。夫子之言行與天道、不可得而聞也。』」
- (3) 『朱子語類大全』卷首附録。
- (4) 『西山先生真文忠公文集』卷四十二。
- (5) 劉燾「西山先生蔡公墓誌銘」（『蔡氏九儒書』卷二「西山公集」附録）、「造化微妙、惟深於理者得之、吾與季通言、未嘗厭也。」
- (6) 『榕村集』卷十三所收、「嗣君又爲予言、其先人曾得朱子手記與蔡西山答問之語曰『翁季錄』者、祕藏多年、與此之『韓文』竝時失之。厥後訪求人間、則不復得矣。可勝惜哉。」

(7) 『榕村集』卷二十八「條奏朱子全書目錄次第劄子」、「臣又按、朱子當日有手自紀錄與蔡元定講論之語名曰『翁季錄』者、此書自宋人罕見之、然近年家有此書、後雖兵火失落、則是猶留傳於人間也。恭遇聖駕南巡、乞旨下獻此書者給賞、倘幸而復得、以備朱子之微言、則萬世學者幸甚。」

(8) 『朱子語類大全』卷首「朱子語錄姓氏」。

(9) 『朱子語類大全』卷首附錄、「嘉定元年、予留成都、度周卿請刻本以幸後學。予曰、『予非敢斬也、所爲弗敢傳者、恐以誤後學耳。』周卿艷然曰、『奚至是。』予曰、『子知今之學者之病乎。凡千數百年不得其傳者、今諸儒先之講析既精、後學之粹類亦廣、而閩·浙·庸·蜀之錐刻者已徧於天下。若稍損費用、則立可以充廚切。凡苟有小惠纖能、涉其大指、則亦能以綴說緝文、或以語諸人、則亦若稍嘗從事焉者、奚必誦先聖書而後爲學乎。亦取諸此而足矣。且張宣公以程子之意類聚孔孟言仁、而文公猶恐長學者欲速好徑之心、滋入耳出口之弊。脫是書之行、其無乃非公所云云者乎。吾甚懼焉。』周卿繇是姑徐之。後數年、竟從予乞本刊諸青衣、彼不過余所藏十之二三耳。然予且謂周卿曰、『子其以此意著于篇端、俾學者毋襲是弊也。』其後李貫之刊于江東、則已十之六七。」

(10) 『朱子語類大全』卷首「朱子語錄姓氏」。

(11) 同上。

(12) 『復齋先生龍圖陳公文集』卷二十一。

(13) 原文、「嘗曰、『吾所聞於師者、皆精微要妙、口傳而不書者也。吾老矣、不可獨善其身、將書之、淑斯人。』」

(14) 『朱子語類大全』卷首「朱子語錄姓氏」。

(15) 『中庸章句』第三十三章。

(16) 『論語』述而篇、「子曰、『默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。』」朱注、「識、記也。默識、謂不言而存諸心也。」

(17) 『勉齋先生黃文肅公文集』卷二十「書襲夢錫所編晦菴先生語錄」。

(18) 『桐江集』卷八(『宛委別藏』本)。「元代珍本文集彙刊」景印臺灣國立中央圖書館藏鈔本『桐江集』卷四では、「委先君訂正」

- が「委先校正」に作っている（國立中央圖書館、一九七〇年三月）。
- (19) 『鶴山先生大全文集』卷八十七「寶章閣學士通議大夫致仕贈宣奉大夫曹公彥約墓誌銘」。
- (20) 『新安文獻志』卷六十九。
- (21) 原文、「『文公語類』出于衆手、純駁不一、自加詮擇、爲『朱子語粹』十卷。」
- (22) 原文、「楊與立編次晦庵先生之語、蕭一致刻于道州。」
- (23) 『朝鮮古寫徽州本朱子語類』卷首、「至嘉定庚辰・辛巳間、建安楊與立始約爲『語略』、行於東南。」（中文出版社景印本、一九八二年七月）
- (24) 近刊豫定。
- (25) 李方子については、拙稿『晦庵先生語録大綱領』攷―附録朱子・范如圭・程端蒙・李方子の佚文―」（『中國思想史研究』第二十八號、一二三〜二〇一頁、京都大學中國哲學史研究會、二〇〇六年三月）を参照。
- (26) 原文、「李方子編濂溪・康節・横渠・明道・伊川・晦庵・南軒・東萊之說、類而集之。」
- (27) 「有所謂『格言』・『精語』繼『語略』而出、皆非朱子語録全書也。」
- (28) 『字溪集』卷十二附録。
- (29) 『鶴山先生大全文集』卷五十五。
- (30) 同上、卷四十二「史守文孟博篤齋說」を参照。
- (31) 『朱子語類大全』卷首「朱子語録姓氏」。
- (32) 原文、「南城包揚顯道錄朱侍講論文之語。」
- (33) 近刊豫定。
- (34) 『朱子語類大全』卷首「朱子語録姓氏」。
- (35) 『陳克齋先生集』卷五。

- (36) 近刊豫定。
- (37) 『赤城後集』卷二十八所收、「自謂『窮年砢砢、庶於此歸宿乎。』」
- (38) 同上、卷十九所收、「其分門寡、其聯屬者不殊、使人從容探討。」
- (39) 『朱子語類大全』卷首「朱子語錄姓氏」。
- (40) 原文、「吳必大記錄晦庵先生之語、朱鑑刻于興國。」
- (41) 『朱子語類大全』卷首「朱子語錄姓氏」。
- (42) 黃士毅編『蜀類』に收められている輔廣錄の一部は朱子の訂正本である。『朱子語類大全』卷首附録黃士毅「朱子語類後序」を参照。
- (43) 原文、「有『六經註釋』・『四書問答』・『通鑑說』・『師訓編』・『日新錄』・雜著藁、皆藏於家。」
- (44) 前掲「眉州刊朱子語類序」、「從朱文公最久、盡得公平生語言文字。」
- (45) 『朱子語類大全』卷首「朱子語錄姓氏」。
- (46) 同上。
- (47) 原文、「事文公最久、議論尤有根據、嘗次序所聞曰『先師德言。』」
- (48) 『朱子語類大全』卷首「朱子語錄姓氏」。
- (49) 『重編瓊臺藁』卷九。
- (50) 『四庫全書總目提要』卷九十五「子部五 儒家類存目一」、「前列『道學統宗』一圖、上溯義・孔、而以伯羽直接朱子之下……後附『墓表』・『行實』、載朱子詩二首及『敬義堂銘』。」
- (51) 『朱子語類大全』卷首「朱子語錄姓氏」。
- (52) 原文、「是書見康熙『志』。恪從朱子游、此蓋記其所受於朱子者。今佚。」
- (53) 原文、「淹貫經史・諸子百氏之書、工於詩賦。後集朱文公語錄、類爲別集、以詔後學。學者宗之。」

- (54) 原文、「凡六經之要旨、『論』・『孟』之奧義、悉可以類而求之。延平廖德明爲之序。」
- (55) 原文、「蜀人以晦庵語録類成編、處州教授東陽潘攄取其『論語』一類、增益其未備、刊於學宮。」
- (56) 原文、「潘攄、金華人、嘗爲處州教授、因蜀人所編『朱子語類』中『論語』一門、補其未備者、爲『論語語類』。」
- (57) 「嘗以李貫之所編『朱子語類』、專取其『論語』、補其不備、別爲『論語語類』行世。」
- (58) 婺録の刊行年代の推定は前掲蔡杭「饒州刊朱子語後録後序」による。
- (59) 『晦庵先生朱文公文集』卷七十二。

西脇常記教授退休記念論集「東アジアの宗教と文化」

2007年12月20日発行

編集及発行 西脇常記教授退休記念論集編集委員会
京都大学人文科学研究所
Christian Wittern 研究室
〒606-8265 京都市左京区北白川小倉町47